

7/23
田島俊彦

原発の航空機テロ議論

高浜3、4号機を想定

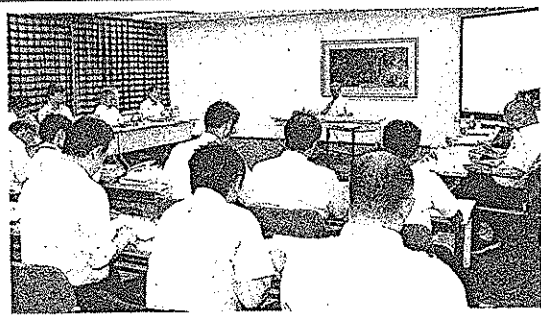
県原子力安全専門委

県原子力安全専門委員会（中川英之委員長）が二十一日、県庁で開かれた。委員からは関西電力高浜原発3、4号機（高浜町）の使用済み核燃料プールに航空機が意図的に衝突した際の危険性を指摘する声が上がった。関電は放射性物質の放出を低減する資機材や手順は「有している」と確認している」と被害拡大を否定した。

菅教授）は使用済み核燃料プールに航空機が衝突し、プールが壊れると「一気に使用済み核燃料が顔を出し、溶融が始まる」と指摘。「そこに放水砲でいくらか水を掛けても安定した状況にならない。想像しただけで恐ろしい」と述べた。関電は「テロ対策なので全ては申し上げられない」と前置きした上で「放水砲などで燃料が冷却でき、水量が確保できるかを確認し

ている」と主張。新規制基準の考え方として「影響緩和と放射性物質の放出を低減すること」と対応が正当であることを示した。使用済み核燃料の危険性については「十分冷却した後燃料なので崩壊熱はかなり低いレベル」と反論した。

中川委員長（福井大名菅教授）の提案で次回以降、使用済み核燃料の詳しい説明を聞いた上で再度議論することになった。



高浜原発3、4号機の安全対策について議論する県原子力安全専門委員会の委員ら。県庁で

次回の日程について中川委員長は原子力規制委員会の工事計画と保安規定の審査が終了するころを想定し「規制庁から審査の実態を

放射性物質の「対策不十分」

（塚田真裕）

二十一日の県原子力安全専門委員会では、前回に引き続き、過酷事故で海に流れ出た放射性物質の対策が不十分だとして、指摘の対象になった。

関西電力は、放射性物質が海に流れ出る前に、側溝に設置した吸着剤「ゼオライト」で捕捉し、通過しても砂に吸着して粒子状になれば、海に張った「シルトフェンス」で捕捉。水に溶けた放射性物質はフェンスを通過するが、フェンスの整流効果で広がる範囲を小

さくできると説明した。

県立大教授の近藤竜二委員は「対策はセシウムを対象にしているようだが、ストロンチウムもたくさん出る」と指摘。ストロンチウムは海水の主要成分であるため、「放射性核種と安定核種を分けて取ることはできない。技術的な問題では？」と問いただした。

関電は「もっともな指摘」と認めた上で、東京電力福島第一原発の汚染水対策で開発中の技術を活用する方針を示した。ただ、近藤委員が「可能なのか」と強く迫ると、「詳しい中身は公表されていない。申し訳ない」と言葉を濁した。名古屋大学大学院教授の山本章夫委員は「無理」と明言した。（西尾述志）